難読漢字で遊ぶ：「娘」と「姫」

2022/01/08　　TI

日常生活での気分転換や老化防止のために、同窓会 HP に「難読漢字（送り仮名、二字漢字）」ページを設置してあります。個々の漢字は見慣れた漢字なのですが、熟語となると難読となるものがあります。ここでは、話題として、「娘」と「姫」を含む熟語を取り上げます。

これらは、なんと読むでしょうか？　（答は本稿後半の第３節にあります。）

娘：紅娘、豆娘

姫：乙姫、兄姫、妖姫、赫夜姫（地名）、木花開耶姫

「娘」も「姫」も「女」偏の漢字です。「女」偏の漢字は、「男」を含む漢字に比べてずっと多くあります（下記の関連投稿を参照）。「娘」と「姫」の由来についても調べましたので紹介したいと思います。

関連投稿：2019-09-30：「女」と「男」の組合せ漢字

常用漢字では、女偏の漢字が３５字あるのに対し、“男”を含む漢字は ２ 字（？：「甥」と「虜」）しかありません。漢字の部首において、「女」はありますが「男」はありません。漢字「男」は、部首である「田（農地）」と「力（農具のすき）」とから成る会意文字で、「すきで田を耕（たがや）す」の意味です。後に耕作する「おとこ」の意味に使われるようになりました。「女」偏の漢字が多くある理由として、漢字を作った人々はおそらく男だったので、女性の持つ多彩な性質に惹かれ、「女」偏の漢字が多く作られたのだとの説明があります。

1．「娘」の由来

「娘（むすめ）」は古語「産す（むす）」に由来しています。君が代の歌詞「苔のむすまで～♪」の「むす」です。この「産す（むす）」には、生じる・発生する・増えるなどの意味があります。「産す＋女（め）」→「娘（むすめ）」となりました。「娘」は元々「お嬢さん」にも使われている「孃（嬢）」と書きました。「孃(嬢)」は「女」と「襄」からできていています。「襄」には「あわせに綿を詰め込む、入れ込む、割り込ませる、柔らかい」という意味があり、「孃（嬢）」→「柔らかい女性」→「むすめ（簡略化し『娘』）」を意味するようになったというのです。

また「息子」も同じ「産す（むす）」からきていて、「産す＋子（男性の尊称・自称）」→「息子（むすこ）」となりました。「息」は生命・息吹を表す言葉で〈息をする〉→〈生息する〉→〈殖える・殖やす〉という意味があります。「息」と「産」は同じような意味をもつ文字だったのです。

「娘」には「（親から見た）女の子供」という意味のほかに、血縁関係を限定しない「若い女性」の意味もあります。私が高揚感を覚えるという「娘」は後者の意の「娘」です。一方、「息子」は「（親から見た）男の子供」だけを指し、血縁関係のない男の人については使いません。ましてや、血縁関係を限定しない「若い男性」の意味はありません。女性の方は、日常において血縁関係を限定しない「若い男性」をどんな言葉で表現しているのでしょうか？

2．「姫」の由来

ウィキペディア（Wikipedia）で「姫」を調べると以下の通り。

姫、媛（ひめ）は、およそ皇室から公卿、将軍家、大名など高貴な身分にあった人の息女の敬称として広く用いられた。特に内親王、女王を姫宮と呼んだ。転じて遊女や風俗嬢（特に売春婦）、あるいは小さくかわいらしいもの、自分の娘（特に乳児時代）を指す場合にも用いられた。本来姫という呼称には年齢制限はなく、江戸時代までは高齢の者も姫と呼んでいたが、童話やファンタジー等の影響により現代においては「姫は幼い･若い女性」というイメージが定着し、時代劇においても高齢の女性には「姫」を用いない。

私にとって「姫」のイメージは、「幼い･若い女性」なのです。「小さくかわいらしいもの」のイメージもあり、例えばそのイメージをもつ花には「姫」を接頭語にした花名が付けられています。HP 花図鑑にあるヒメウツギ（姫空木）、ヒメジョオン（姫女菀）、ヒメツルソバ（姫蔓蕎麦）、ヒメヒオウギ（姫檜扇）などです。逆に、大きい、荒々しいイメージの花には「オニ（鬼）」が付けられたものがあります。例えば、オニユリ（鬼百合）、オニバス（鬼蓮）、オニオオバコ（鬼大葉子）などです。

３.「娘」と「姫」を含む難読漢字

１）「娘」を含む難読漢字の例

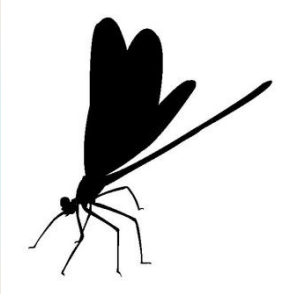
紅娘（てんとうむし）

天道虫とも書きます。由来は枝などの先端に立って行き場がなくなると上に飛び立つ習性なため、それを「お天道様に飛んで行った」と感じ、太陽神の天道からとられ天道虫と呼ばれるようになったとされています。

紅娘の由来は、体が紅色で小さいところからでしょうか。

豆娘（いととんぼ）

豆娘は、元来は日本語では無く中国語(台湾)らしいとのこと。台湾では、豆娘は一般に小形で体の細いトンボの総称として使われているそうです。ただ、語源は分かりません。また、中国に豆娘魚（おやぴっちゃ）という魚がいて、これもはっきりした語源は分からないのですが、子供っぽい愛嬌の残る可愛らしいという意味が込められているそうです。



２）「姫」を含む難読漢字の例

乙姫（おとひめ）

日本のおとぎ話『浦島太郎』に登場する龍宮城の姫（龍宮の主の娘）です。姉妹のうちで、妹の姫のことをいいます。姉の姫は大姫（おおひめ）です。

兄姫（えひめ）

姉妹のうち年長のほうの娘。年少のほうは弟姫（おとひめ）です。

妖姫（ようき）

妖気を感じさせる美女。

赫夜姫（地名：かぐやひめ）

静岡県富士市比奈に「赫夜姫（かぐやひめ）」という字名（あざめい）があります。このあたりには富士山縁起の赫夜姫（かぐやひめ）説話があります。また、観光施設「富士山かぐや姫ミュージアム」も作られています。

木花開耶姫（このはなさくやひめ）

　桜の如く華やかに咲いて、桜のように儚く散った絶世の美女。まさに美人薄命を絵に描いたような神様です。天照大御神（アマテラスオオミカミ）の天孫、瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）に一目惚れされ、妻となったとあります。日本神話で最も美しいと誉れ高い女神です。

木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）